

Title	マホメット物語 III : その死後
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学論集. 12 p.201-p.214
Issue Date	1995-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79664
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

マホメット物語Ⅲ — その死後

勝 藤 猛

A Story of Muhammad III — after his death

Takeshi KATSUFUJI

The prophet of Islam died in 632 peacefully in his wife's room at Medina, and was immediately succeeded by his old friend Abu Bakr. Two years later, Umar, the most energetic organizer of the Muslims, came to the throne. The third caliph, Uthman by name, was assassinated by one of his fellow-believers. Then Ali, Muhammad's cousin, was elected as the fourth caliph, who was again killed by an extremist of his own sect.

Whatever the personality of those caliphs may be, the Islamic community went on conquering eastern and western countries, admitting millions of non-Arab followers. Members of the reputable family of Quraish of Mecca founded the Umayyad and Abbasid dynasties, who had a blood-tie with the prophet. In 1258 Mongol armies under the prince Hulagu captured Baghdad and abolished the historic institution of caliphate.

In modern times Islam has two aspects; one is that the simplicity and clarity of the doctrines have been kept without much modification since the 7th century. The other aspect is how the Muslims should deal with the impact of the West. They are endeavoring in vain to find a solution of the problem.

1 預言者マホメットの死

西暦630年1月11日（イスラム暦8年9月20日）、メディナのイスラム教団の指導者マホメットと、メッカの政治指導者アブー・スフヤーンの間に妥協が成立した結果として、マホメットは軍を率いてメッカに入城した。彼はこの町の偶像を破壊したが、市民に改宗を強制することなく、偶像崇拝よりイスラム教がすぐれていることを彼らが理解する雰囲気を作るように努めた。

この寛容さに立腹する人たちがあった。メディナのアンサール、つまりメッカから来たイスラム教徒＝ムハージルーンを援助した人々である。彼らはこの態度を手ぬるいと感じた。自分たちはイスラム教のために非常な努力をしてきたにもかかわらず、マホメットには自分たちよりも故郷メッカの同胞が大事なのか、という疑いが起こった。「血縁や故郷に対する情愛は、信者へのそれに勝るのか」と迫る人々に向かって、預言者は「私はあくまであなた方と共に生き、共に死ぬつもりである」と答えて、安心させた。彼はメッカ滞在中、親戚・友人の家でなく、町の外に張った天幕の中で寝、旅行者の作法で礼拝を行った。

メッカ平定の後、イスラム軍は多方面へ征服戦争に出動した。ただマホメットが570年に生まれたとすれば、彼は60歳になっており、相当な高齢である。その政治生活として、イスラム支配はアラビア半島全体をおおい、そこから進出するほどであった。他方、私生活の面では、幾人もの女性を相手に悲劇・喜劇を演じていた。とはいえ彼は何よりも、神の預言者として、人々にアッラーの真実を教え、それを崇拝する方法を説いていた。632年3月（イスラム暦10年12月＝ズル・ヒジャ月＝巡礼月）、彼はメッカに行き、まずウムラ（小巡礼）を行った。それはカアバ神殿の周囲を巡ることと、その近くのサファー、マルワ両地点間を往來することから成る。次いでハッジ（大巡礼）をした。それはメッカ郊外の谷や丘にあるいくつもの神殿に参拝することである。彼が強調したことは、この巡礼がアッラーだけのためであって、他の神々に関わりないことである。彼が参拝する動作のひとつずつを、信者は規範として注目した。

この巡礼の後、すぐメディナへ帰った。それ以来、彼は健康をそこねた。死が訪れたのは632年6月8日、午下りのことである。妻のひとり、アイシャの胸に頭を載せて安らかな最期であった。他の妻たちも駆けつけた。

預言者の死は教団にとって衝撃である。死後のことについて、信者も預言者自身も何の考えも話し合いもしなかった。いつもは手回しのよい神の啓示も、預言者の死の予告や死後の対策について何も指示してくれなかった。

ウマルはマホメットの死を素直に受け取ることができなかった。彼は預言者が横たわっている家の庭に立ち、つめかけて来た群衆に向かって宣言した、「預言者は死んだのではない。彼はしばらくアッラーのもとへ行ったのである。すぐ戻って来て、彼は死んだと言いふらした人の手と足を切り捨てるであろう」と。そこへアブー・バクルが来た。自分の主人であり同志である人が寝かされている部屋に入り、体の上のおおいを取り、顔に口づけした。それから庭へ出て、興奮しているウマルを静めた後、穏やかに人々に語った、「マホメットを崇拝してきた人は、いま彼

が死んだことを認めなければならない。しかしアッラーの神を崇拜してきた者にとって、アッラーは依然として生きており、決して死ぬことはないのだ」と。

マホメット逝去の報はメディナ人、とくにハズラジ族の間にある種の感情を呼び起こした。彼らは、マホメットと共にメディナへ来た“移住者”に対し、ずっと劣等感を抱き続けてきた。預言者亡き今、彼らはよそ者に従う必要ないと考えた。彼らは集会を開いて、自分たちの代表を選びにかかった。マホメットの家でこの知らせを聞いたアブー・バクルはその集会の場へ急いだ。途中で、アウス族－ハズラジと対立関係にある一の者に出会った。その男は、どんなことがあってもハズラジにだけは権力を渡すまい、と言う。他の部族民も来て、人の死をよそに夜ふけても議論が続いた。しかしそのうちに皆が気づいたことは、メディナ人同士の競争によってマホメット到来以前の混乱状態に戻るべきでない、という賢明な結論である。

アブー・バクルはその集会の参加者に静かに語りかけた。彼は預言者よりわずか年下で、終始彼に忠実であり、温厚な人柄で人々の信頼を得ていた。この場合、気性の激しいウマルは敬遠される。彼自身、分をわきまえて身を引き、アブー・バクルを後継者として推薦した。一同も異議なくそれを承認した。ウマルの自制心がイスラム教団の危機を救ったといえる。初期イスラムの順調な発展に妥協と自制という冷静な態度が大きな役割を果たしたこと、特筆に値する。

室内では横たわる預言者を血縁者が囲んでいる。その中心はいとこのアリーである。彼は後継者として血のつながりのある人を望んだけれども、教徒の中でそれを支持する人はあまりに少ないのが不安であった。そこへアブー・バクル擁立の知らせが入った。一同は腹を立てたが、人数に大きな差があり、集会の決定を認めざるをえなかった。血縁者のわずかな抵抗は、身内だけで大急ぎその部屋の地下を掘って、預言者を埋葬したことである。それによりアブー・バクルが葬儀委員長＝公認後継者になることを排除した。また最愛の妻アイシャ（アブー・バクルの娘）は葬儀の段取りを知らされず眠っていて、土を掘る音で目を覚ましたといわれる。¹⁾

2 正統カリフ時代

アブー・バクルはカリフの位にあること2年で、世を去った。預言者より2、3歳年少であったというから、死んだのは60歳過ぎであったろう。イスラム政権をマホメットから受け継ぎ、大過なく次期カリフ＝ウマルに渡した。彼は生前からウマルを後継者として信者たちに推薦していた。それが抵抗なく認められたのは、彼の人格と、ウマルの実力、とくに組織者としての才能と精力のたまものである。25歳にして回心してマホメットの教えに従うようになってから20年近く、イスラム教団にとってもっとも頼りになる人材となっていた。

ウマルは在位10年にして（634～44）、個人的怨恨からペルシア人奴隷によって殺された。宗教的・政治的背後関係はなさそうである。

息を引き取る前に彼は後任を選ぶ6人の委員を任命した。いずれもメッカのクライシ族の有力者であって、メディナ人はアンサールといえども加わっていない。メッカ人によるイスラム支配

は依然として続いている。6人は選挙権とともに被選挙権をもつ。ハーシム家のアリー（マホメットのいとこ、また娘ファーティマの夫）と、ウマイヤ家のウスマーン（マホメットの娘ルカイヤ、次いでウソムの夫）が有力視されたが、結果はウスマーンの選出となった。アリーはウマルと対照的に陰性で、組織能力に欠けるとみなされていたのであろう。ウスマーンはマホメットがイスラム運動を起こした初期の信者、当時30歳ほど、勇者というよりは道楽者、預言者の娘に引かれて信仰に入ったと評されるだて男であった。あれから30年余、その彼も今は60歳を過ぎ、氣力が昔に勝るはずがない。臆病者との評価は、アラブ人集団の長としては致命的である。これに対しアリーは野党的立場に立った。656年6月、給与に不満をもったエジプト駐屯兵士がメディナへ来て、カリフ政庁に訴えた際、過激分子がコーランを誦中のカリフ＝ウスマーンを殺した。ウマルの死も暗殺であったけれども、あれは個人的な問題であった。今回ののはイスラム教徒による殺害で、教団に与えた打撃は甚大である。

反乱兵が政庁を襲った時、アリーはカリフを保護するどころか、反乱軍の代弁を勤めた。このようなメディナの雰囲気であって、彼はやすやすとカリフの位につくことができた。しかしアリーの下でイスラム政権は安定しない。ウスマーン選出委員のふたりが、マホメットの未亡人アイシャを戴き、アリーと武力対決に入った。アリー側が勝って、ふたりの男は死に、アイシャは捕虜となった。場所はバスラの近く、彼女はらくだの背につけた籠の中にいたので、“らくだの戦い”と呼ばれる。彼女は名誉を失うことなく、メディナで静かな余生を送り、66歳で世を去った。“信者の母”とたたえられる。この戦争が彼女に因んだ名で呼ばれるのも、宗教文献がアリーよりもアイシャに味方しているからであろう。彼女はマホメットにもっとも近い人として、ハディース（聖伝）のための貴重な材料を提供した。

アリーはさらに別の対立にも巻き込まれる。メッカのウマイヤ家の家長でシリア総督ムアーウィアは、カリフ＝アリーに忠誠を誓うことを拒否し、ウスマーン殺害の責任をアリーに求めた。アリーは勿論それを無視し、双方が戦争に入った。それに対する調停が試みられたところ、アリーの支持者のうちの過激派が、人間による調停を認めず、「判決は神のみに属する」として離脱した。彼らはハワーリジ（出て行った人々）派と呼ばれる。アリーはもともと少数派的な人物で、その中にさらに分派を生み、遂にはそのひとりに刺殺されてしまう。こんな人を頭に頂いてはイスラム政権の見通しは暗い。

カリフの個性がどうであろうと、イスラム教団はその勢力範囲をアラビアから外に拡大しつつあった。例えば639年、ウマルの時、アムル（マホメットがメッカに帰った際に入信）は3,000の兵を率いてエジプト²⁾に進攻し、ビザンツ軍を撃破してそこを占領した。当時、その住民はコプト語使用のキリスト教徒であった。以後、アラビア語・イスラム教が次第に優越し、この地はイスラム圏の中でもっとも重要な地域のひとつとなる。

東北、イラン高原方面では、641年、ハマダーンの西南、ニハーワンドの戦いでササン朝ペルシアの軍を破ったことにより、同王朝は事実上崩壊した³⁾。イスラム史家は“勝利の中の勝利”

と自賛する。ここまで意識するのは、この地方が格別に異質の文化の地と見られていたからであろう。

イスラム教創始者の死後、その勢力が一層拡大したのはなぜか。答えを考えればこうなる。時代の変化に対応しようとする意欲―人間の平等の主張など―があり、それが単純明快に説かれたからであろう。インドでカースト制度をもつヒンドゥー教の世界にイスラム教が導入されるや、たちまち下層の間に信者を得たことが、著しい例である。ビザンツ、ササン両朝の下でも、平等を待望する人々の渴望にイスラム教が答えられたことが想像される。単純さをいえば、「イバーダート」（儀礼的行為）の第一は信仰告白、つまり「アッラーのほかには神なく、マホメットは神の使徒である。」を唱えることと、1日5回の礼拝をすることが基本である。断食は一時的のものであるし、喜捨と巡礼はできなければなくてもよい。コーランという聖典はあるが、内容はごく人間的である。

なお、アブー・バクル、ウマル、ウスマーン、アリーのカリフを「正統カリフ」と呼んでいる。これは誤解されやすい：つまりほかにもカリフを名乗るものがあった、正統争いをし、これが正統を勝ちとったのかと。「正統」にあたるアラビア語はrāshid、その意味は「神によって正しく導かれた」換言すれば「マホメットから直接に指導を受けた」である。4人とも預言者と個人的に親しい間柄であったことに価値を置く。この語を英語で orthodox と訳し、それが日本語で「正統」とされたわけである。

3 ウマイヤ朝

この王朝は、メッカのクライシ族のウマイヤ家のムアーウィアが、カリフ＝ウマルからシリア総督に任ぜられ、それがカリフ＝アリーと対立して独立をし、世襲的君主制を建てたものである。シリアの住民は、アラム語を用い、キリスト教を奉じている。そこを支配していたギリシア人にアラブ人がとって代わったのである。メッカの政治方式はここでは役に立たない。当然、今までのビザンツ帝国の機構を利用する。東方ではササン朝のそれである。カリフ＝ムアーウィアの下で行政の元締めとなったのは、シリア人キリスト教徒である。またアラブ族は、指導者選出方法として、選挙しか知らない。しかし安定した政権のためには世襲が望ましい。そこでムアーウィアは自分の子ヤジードを選挙する形で後継とした。以後のイスラム諸政権では世襲が原則となる。ただし世襲の場合、後継者が幼少または無能なら、一族中の適任者を決めるのに争いが起こりがちである。ヤジードの子ムアーウィヤ2世が幼くして即位し、半年で死亡したあと、同じウマイヤ家の別の系統からマルワーンがカリフとなり、その子孫へ継がれていく。

イスラム教は急速に拡大し、地域は広がり、人口はふえていった。何十人かの教徒がメッカからメディナに移り、地元の教徒とともに教団を作った。そこでは互いに顔見知りの間柄であった。メッカを併せた後も、信者の緊密な結びつきは変わらなかったであろう。ところがその勢力がアラビア全土に広がると、顔を知らない関係となり、さらにアラビアの外に進出すれば、言葉も通

じないことになる。ここで起こった問題は、アラブでない信者（マワーリー）の地位である。原則的にはすべての信者は神の前に平等である。けれども自ずとアラブと非アラブとの格差がある。ウマイヤ朝でアラブは明らかに支配層をなす。もともとイスラム教団の収入は、戦争の戦利品の一部と、非イスラム（ユダヤ、キリスト）教徒が、信仰と財産の保全とひきかえに出す税とから成る。非アラブでも、イスラム教徒なら、アラブと同じ免税の特権をもつはずである。ところが実際はそうではなく、それがマワーリーの不満であった。

アラブ征服軍の戦士はミスルという軍営集落を作っていた。その中には戦士とその家族、奴隷が住んでいる。戦士には給与として、現金と、現物（主として食料品）が支給される。イスラム国家を維持するための政府の第一の義務である。現物を供給するのは地元のマワーリーの仕事である。イスラム教勢力がウマイヤ朝の支配下で一応の安定を見ると、ミスルの軍事的意識が薄くなって普通の町と同じようになり、またマワーリーの増加はアラブの比重を小さくしていった。数で劣る上に、アラブは出身地の南北により、また同じマルワーン系統の中でも対立が絶えなかった。

宗教的にも、分裂が起こった。ムアーウィアが死ぬと、アリーを指示する派がアリーの子フサインをカリフに擁立しようとして、ヤジードの軍とイラクのカルバラーで衝突した。アリー派は敗れて全滅した。イスラム暦61年ムハッラム月（1月）10日（西暦680年10月10日）のことである。この派は「シーア・アリー」（アリー派）と呼ばれる。預言者マホメットの後継者として、正統カリフを認めず、預言者からアリー、その後は彼の子孫へと継承されることを主張する。この派の名を簡単に「シーア派」という。今のイラン国の教徒の大部分はこの派に属し、毎年、ムハッラム月10日には、フサイン殉教を悼んで受難劇を演ずる。

4 アッバース朝

アッバースとは、マホメットのおじのひとり、アブー・ターリブ、アブー・ラハブに次いでハーシム家の長となった人、マホメットが故郷メッカに戻った時にいた。彼はその妻の妹とも結婚した。そのアッバースから4代目の子孫に当たる兄弟が、ホラサン地方で反ウマイヤ朝運動を起こした。この地方はアラブ人が移住していたものの、土着民に比して少数であり、文化はペルシア的である。兄弟は預言者の出身家系ハーシム家の復活という名目を揚げ、アラブ人のみならず、多くのマワーリーを集め、宣伝活動からさらに軍事行動に移り、ウマイヤ軍をイラクのクーファに破り、兄弟のひとりサッファーをカリフの位につけた。ウマイヤ朝の白に対しアッバース朝は黒を王朝色とし、黒旗・黒服を用いたので、中国でもこれを“黒衣大食”と呼ぶ。

9世紀のアラブ文人ジャーヒズは「アッバースの子孫はペルシア的・ホラサンの、マルワーンの子孫はウマイヤ的・アラブ的」という。しかし新王朝の成立をもって、アラブに対するペルシアの勝利というわけにはいかない。ペルシア人貴族はササン朝・ウマイヤ朝を通じて特権を保っていたし、一方、アラブ人貧民はつねに下積みで甘んずるはかなかった。アッバース朝になって

アラブ的色彩がさらに薄くなったことにより、イスラム統合がより困難になった。イスラム世界拡大に伴う必然である。統合を表面的に強化した、換言すれば体裁を整えたのが、新王朝の意義である。体裁4要素は、カリフ、首都、官僚、ウラマーである。

まずカリフのとくに称号についてである。初代正統カリフ＝アブーバクルは「神の使徒の代理」(ハリーファ・ラスール・アッラー)を用いた。第2代カリフ＝ウマル以後は「信者の指導者」(アミール・ル・ムーミニーン)を取った。アッバース朝になって「神のカリフ」(ハリーファ・アッラー)が現れた。カリフを神格化しようとする宗教権力者の創作で、庶民の信者とは何の関係もないことである。これが体裁の第一。

第2は首都の建設である。第2代カリフ＝マンスールは、チグリス川西岸、バグダードという名のペルシア人集落のある所に、4年ほどかけて直径2キロメートル余の円形都市を作った。公式名を「平安の都」(マディーナ・アッサラーム)というが、民衆はそれを敬遠して、昔からの名前を使っている。この新首都に住むことを許されたのは、アッバース家一族、カリフの側近、高級の官僚・軍人、親衛隊員だけで、庶民の住む町ではなかった。「権力を守るための司令室的城砦」⁴⁾「多国籍企業のコンピューター室のようなもの」⁵⁾といわれる所以である。

門は4箇所あり、東方がホラサン門、東南がバスラ門、西南がクワファ門、西北がシリア門という。みなそれらの土地へ向かう道路の出口のことで、現在、城壁がなくとも、町の出入口がこうした呼びかたをされている。

官僚について、中国の科挙のような採用試験制度がないから、官僚体制が制度といえるかどうか、疑問である。カリフの下にあって行政事務、とくに徴税を総括する職として宰相(ワジール)が設置された。ウマイヤ時代のシリア人行政長官もそのようなものであった。アッバース朝初代カリフ＝アブル・アッバースの下で宰相となってから、第5代カリフ＝ハールーン・アッ・ラシードの治世まで、一貫してこの要職を占めたのは、ホラサンのバルフ出身のバルマク家である。同家はハールーンの怒りに触れ、803年に一族みな殺し、財産没収の悲運に見まわれた。⁶⁾

徴税は特殊な知識経験を必要とし、誰でもはできないから、特定の家系の中で父子相伝となりやすい。税を集めるには、役得としてその一部を取り込むか、そうしていると疑われるのが常であろう。

ウラマーは「知識あるもの」を意味するアーリムの複数形で、「知識人層」といってよい。イスラム教に聖職者はいない、といわれるが、それはマホメット時代のことをいっているのである。⁷⁾

メディーナにおいてすら、多少の分業が行われた。例えば、アブー・バクルが預言者の代わりに礼拝の指導をしたり、エチオピア出身の奴隷上り、ビラールが、信心深さと美声を買われて、礼拝呼びかけの役を勤めたりした。信者が何百万となれば、宗教を職業とする人が出るのは当たり前である。現在、イスラム僧侶はとくに目立つ服装をして、俗人に対する優越を強調しているようである。イスラム的学問・知識は宗教と固く結びついたものであるから、僧侶はすなわち知

識人でもある。彼らは独自の階級組織をもち、カリフの権力を宗教面から支える役割を果たしている。もちろんシーアなど他の派にもウラマーがいて、他派との理論闘争に備えている。この人たちは“書物イスラム”を担う階層であり、これに対し読み書きのできない一般庶民は“実際イスラム”を実践する。お金を出して教団を支えるのは庶民、それをもらって生きるのがウラマーである。

しかしながらアッバース朝は体裁をつくろうだけの政権ではない。実質的役割を十分に果たした。それは商業の分野においてで、これこそメッカのクライシ族の得意とするところで、若き日の預言者の職業でもあった。ルイスの名著『歴史上のアラブ族』から、この時代の経済の一面を表す記事を引用する。

当時の商業生活の繁栄ぶりは、思想や文献に現れている。そこではまじめな商人が道徳的に理想のタイプとして描かれている。聖伝には預言者の言葉として、次のようなものがある。：「最後の審判の日に、正直で信頼できる商人は、殉教者と同格の位置に立つだろう」「信用できる商人は、審判の日に神の玉座の蔭に坐ることができよう」「商人は世界の配達人であり、地上における神の信頼厚い下僕である」

.....

両替商はイスラム圏の市場にはつきものであり、それは9世紀に銀行となった。それを支えたのは明らかに富裕な貿易業者の預金である。例えば、首都バグダードに本店が、帝国内の大都市に支店があって、小切手や信用状の完備した制度があったから、バグダードで振り出した小切手をモロッコへ持って行って現金化することが可能であった。バスラーイラクの貿易港一では、主だった商人はみな銀行口座をもち、バザールでの支払いの小切手だけで行われ、現金は一切使わなかったということである。⁸⁾

パックス・イスラミカと呼ばれたアッバース朝下の平和と安定をよく示すものである。9世紀の西アジアに“キャッシュレス”時代が出現していた。⁹⁾

また同書は、ある役人一家の家計を紹介する（単位はディナール金貨）。

収入	40,000	父親から相続
支出	1,000	家屋の修理
	7,000	家具・衣類・奴隷女、その他の生活便利品の購入
	2,000	商人への貸付
	10,000	予備費としての現金を地中に埋める
	20,000	残額、土地購入、それからの収入を食費に充てる。 ¹⁰⁾

財産の保全方法として、1には、目に見えるものに使い、人に示す、土地・家屋など。2には、貴金属・宝石など、隠せるものに変える。いざという時、持って逃げるのに容易。3は、現金を地中に埋めて隠す。上述の銀行預金は平和時の大都市だけの現象で、イスラム史上むしろ例外に属する。

5 権力の分解

1960年ころのイランでの話、モハンマド・レザー・シャー・パフラヴィーの治下でのこと、首都テヘランから南方への幹線道路のうち、イスファハン、シーラーズ間の交通は、昼間、バスやトラックが一团となり、兵士を満載したトラックが前後を護衛して進行する。両都市間の荒野は、カシュカイ族（トルコ系）遊牧民が横行して危険だとのことである。西アジアでは土地が広く、集落は遠く離れて散在しているから、緻密な支配はきわめて困難である。政府の支配力は面でなく、点々たる大都市でしかない。歴史地図の上で色を塗られた地域を、実際の支配領域と考えてはならない。

預言者もその後継者たるカリフも、イスラム教団の全権を掌握する人であった。しかし歴史的展開のうちに、全権をひとりで行使するのは不可能となる。

- 1 政治支配の二重構造：アッバース朝はホラサンからエジプトまで、アラビアを含む広大な領域を持つ。しかしその中にはアッバース朝カリフを認めない、独立政権が存在した。独立の表現は、金曜日の集団礼拝にカリフの名前を唱えないことである。主な政権を表示し、簡単な説明を加える。

ペルシア系地方政権

王朝名	出身地	名前の由来	期間
ブワイ（ブーヤ）	カスピ海西南岸	始祖アリーら兄弟の父の名	665～1349
ターヒル	ホラサン	始祖の将軍の名	821～ 873
サファール	シースタン	始祖ヤアクブの職業（銅細工人）	867～1495
サーマーン	バルフ	始祖サーマーン・フダー	819～1005

945年、ブワイ朝（シーア派を奉ず）がバグダードを占領、政治的に支配し、カリフの権限を縮小。

2 宗教権力と政治権力の分裂

トルコ系地方政権

ガズニ	ホラサンでのサーマーン朝奴隷軍指揮官	首都名	977～1186
セルジューク	カスピ海・アラル海北方	部族名	1038～1194

ガズニ朝マフムード(977～1030)、インド侵入、イスラム教を伝える。北方民の常として辮髪をしているところが細密画に描かれている。

1055年、セルジューク朝（スンニ派）がブワイ朝に代わってバグダードを支配。

両朝とも君主が“スルタン”の称号を取り、世俗的支配者となる。カリフは宗教的権力だけをもつ。民衆にとって、物や体はスルタンが、心はカリフが、支配する。

ソーンダースはいう：Politically, the Seljuks were to play Shoguns to the Caliph's Mikado.¹¹⁾ 世俗的支配者としてのスルタン＝将軍、精神的支配者としてのカリフ＝天皇という図式は当たっている。

アッバース朝は1258年、フラグの率いるモンゴル軍の攻撃によって滅亡し、カリフ制も廃絶する。その称号はエジプトのマムルーク朝の後援により復活し、さらにオスマン・トルコのスルタンが取って、スルタン・カリフ制となる。しかしいずれも名目だけであり、実権を取り戻すことはなかった。

6 イスラム教の現在

イスラム教の単純明快な教義は、文化交流のまれであった地域では、原型のまま残っているようである。その一例：

1955年、アフガニスタン国、ヘラート州（その後、分かれて Ghôr州）に属するジルニー村にて。ここは外部との交通が極めて不便、車は通じない。

A—ゾバイル。父はハージー、45年前、メッカに参詣。本人はこの村で随一のインテリ（読み書きができる）、首都カーブルへ行ったことがあり、その時に買った金ぶちの眼鏡をかけ、まっ白の上等な着物をきている。

B—梅棹忠夫。35歳、人類学者、大学助教授。（ ）は同氏の感想

A—神を信ずるか？

B—信ずる。（私はアニミスティックな傾向をもった不熱心な仏教徒）

A—神は唯一か、多数か？

B—神は唯一ともいえるし、無数に存在するともいえる。

A—神は唯一でなければならぬ。なぜならこの世界はただひとつであるからだ。

A—来世を信ずるか。地獄・極楽の存在を信ずるか？

B—我々の宗教にも同じものがある。（私の素朴なる仏教的教養）

A—預言者を信ずるか？

B—我々の宗教に預言者はない。

A—ではどのようにして神の教えを知るのか？

B—先祖代々、神の観念を受けついで来ている。

A—先祖はいかにして神について知ったか、預言者なしに神について知ることができるか？

B—私は科学者であって、宗教家でない。我が国にもムラー〔僧侶〕がいる。その人なら答えられるだろう。

A—そうだ、ムラーでないあなたにこんなむずかしいことを尋ねても、十分な説明が得られないのは当然である。（ゾバイルの一方的勝利）

梅棹が得た教訓：

1—イスラム世界では神学的訓練が徹底している。彼は山奥の小さい村の坊さんに過ぎない。

学校も出ていない。それが、こんなきちんとした神学を論争の形で展開できる。

2—イスラム教では、預言者は論理的な必然性をもつ。神が超越的であるからには、それと人

間とを媒介するものとして、預言者は必要である。

3-ゾパイルの“論理”はドグマティックである。始めから自分に都合のよい結論を用意してある。論理はそれを他人に押しつけるための手段である。¹²⁾

アフガニスタンの中央部と反対に、外界との交渉が激しい地域で、イスラム教は動揺した。オスマン・トルコ帝国の後退は、それまで勝者の論理で一貫してきたイスラム教が、敗者の立場に立つことになった。ヨーロッパのナショナリズムが、押しつけか導入かによってイスラム圏に入り、「イスラムの地」(ダール・ル・イスラーム)が多数の国家に分解した。それゆえ、石油が発見されると、それはそこを領有する国家の所有となり、他国民は何の権利ももたない。またヨーロッパにおける科学・技術の進歩も、イスラム教徒の羨望的であり、追いつく可能性は極めて少ない。西洋キリスト教世界に対するイスラム世界の態度については、ルイス前掲書の結末部が検討に値する。[]は筆者の説明。

西洋の衝撃は、鉄道と印刷機械[運ぶもの、前者は人・物を、後者は情報を]、飛行機と映画[同じく運ぶもの、より新しい方法]、工場と大学[作る所、前者は物を、後者は人間を]、石油採掘者と考古学者[掘る人、前者は経済財を、後者は文化財を]、機関銃と思想[人を殺すもの、前者は生物的に、後者は社会的に]を伴って来て、経済生活の伝統的構造を打ち砕いて、修復不能にした。それらはアラブ人ひとりひとりに、仕事においても余暇においても、私生活でも公的生活でも、影響を与えているし、また、先祖から受け継いだ社会的・政治的・文化的形態を再調整することを求めている。[アラブ人は例外なく、生活のあらゆる面で西洋の影響を受けている]

これら再調整の問題において、アラブ諸民族はいくつかの道からひとつを選ぶことができる。まず第一は、目の前にある現代文明の相対立する異説[資本主義と社会主義の体制であろう]のどれかに屈服し、自分たちの文化とアイデンティティを、より大きく有力な全体の中に溶かしてしまうことである[アラブであることをやめること]。第二には[これと正反対に]西洋とその作品すべてに背を向け、失われた神政の理想[マホメット時代のもの]への復帰という幻想を求めることである。ただしその落ちつく先は[神による政治でなく]洗練された専制であり、搾取と抑圧の道具と、非寛容の言葉遣いとを、やはり西洋から借りることになる。

最後に第三の道は、一このためには外国の干渉という刺激を無くすることが必要不可欠である一彼らの社会を内部から革新することに成功するかもしれない。その場合は西洋と対等の協力という関係に立ち、科学と人文と両方から、幾分かを、それも影だけでなく、実態をも吸収し、それらを自分たち自身の古い伝統と調和させるのである。[今までイスラム世界が西洋から吸収したのは、科学の影だけ、例えば、自動車を買って運転するが、自動車を製造する能力はない]¹³⁾

イスラム教の預言者マホメットは、メッカの町に住み、時代の変化を見て、改革の必要を感じ取り、時代に対応すべきことを、神のお告げに従って人々に警告した。現在、イスラム尊重とは、

この警告に従って、時代の変化に遅れないように対応することであろう。そのためには、声高な主張よりも、静かな反省が必要である。イスラム教徒の自己客観視で筆者の記憶に残るのは、次のふたつの場合である。

1960年ごろ、アフガニスタン国カーブル、30歳代、研究者：「イスラム教では、この世でよいことをすれば、あの世で極楽へ行ける。わるいことをすれば、地獄へ行く。しかし異教徒はだれも極楽へ行くことはできない、と子供の時、モスクの坊さんに教えられた。それで私はこう言ってやった、ぼくはきたないイスラム教徒と極楽へ行くより、きれいな異教徒と一緒に地獄へ行きたい、と。そしたらひどく叱られた。」

1967年ごろ、イラン国シーラーズ、大学生：「イスラム教にふたつある、教えられるけれども実行しないものと、教えられないが実行するものと。」

なお全世界のイスラム教徒の数は、絶対数で言うより、ギブに従って、世界人口の1/7と理解しておくのが便利であろう。¹⁴⁾

註

- 1) マホメットの晩年については、Rodinson, Maxime, *Mohammed*, 1973, pp262~292.

宗教文献の偏向を排除して歴史的意義を引き出そうとする試みは、評価できる。

- 2) 当時の歴史的地名を簡単に説明しておく。現在の国家・国境を忘れることが必要。

エジプト：ナイル川下流域。

シリア：地中海東岸地域。

イラク：チグリス・ユーフラテス川下流域、サワードともいう。

ジャジーラ：同上流域。

ホラサン：イラン国東北部／アフガニスタン国西北部／それに接する旧ソ連領。その中の主要都市は、ニシャブル／バルフ、ヘラート／メルヴ。なおイラン高原の大部分は塩砂漠で、無住地帯である。

- 3) ネハーワンドの敗戦後、ササン朝の王ヤズダギルド3世は、東北方に落ちのびたが、一夜の宿を与えた粉挽き人の手にかかって最期を遂げた（651年）。これが同朝の滅亡である。中国、南宋の場合、首都臨安が元軍に降伏した（1276年）あと、皇族が船で海上に逃がれ、遂に広東近くで全員が入水して死んだ（79年）。南宋の滅亡は後者の年とされる。つまり王朝最後の君主の死亡または捕虜の時をもって、その王朝の滅亡とするようである。

- 4) 森本公誠編著『イスラム・転変の歴史』1985年、p30、森本執筆部分。

- 5) 嶋田襄平『イスラムの国家と社会』1977年、p164。

- 6) 「噴水は高く上れば下りて来る」というペルシア語の諺がある。その説明としてこんな話がある。アッパース朝のカリフ＝ハールーンが庭の木からりんごを取ろうとした。しかし実は手の届かない高さにあったので、カリフが台になり、宰相ジャアファル・バルマクが彼の肩の上に立って、りんごを取った。地位とは逆の行為である。それほど宰相は偉かった。それを庭番が見ていた。カリフは帰りがけに庭番に褒美をやろうとした。これもカリフの気兼ねか。庭番は褒美の代わりに証明書を書いてくれと頼んだ。内容は、この人はバルマク家と関係ないという主旨である。絶大な権力を振るう者はいつかは没落すると思ったからである。果たしてバルマク家の運命が一変し、一族みな殺しとなった。庭番は例の証明書のおかげで難を免れた、と。勝藤猛、ハーシェム・ラジャブザーデ『ペルシア語ことわざ用法辞典』1993年、p 270。

- 7) イスラム教徒、およびその同情者は、マホメット期のことをイスラム教の本質として言明する。しかしそれ

は“たてまえ”であり、それが“ほんね”と相違しても気にしない。彼らの表現に注意が必要である。

- 8) Lewis, Bernard, *The Arabs in History* Hutchinson Univ. Library, 1968, p91.
- 9) 安定して信用のある社会において有価証券が貨幣と同じく用いられる例は、中国、北宋、1023年、世界最初の紙幣（名は交子）を発行したことである。その起こりは、現金を預け、その預かり証が誰の手に渡っても、現金化できる習慣が四川地方で行われたことである。宮崎市定『中国史』下、1978年、pp312～3.
- 10) p93.
- 11) Saunders, J.J., *A History of Medieval Islam*, London, 1965, p147.
- 12) 梅棹忠夫『モゴール族探検記』1956年、pp109～114.
- 13) pp177～178. 念のため原文を示す。

The impact of the West, with its railways and printing-presses, aeroplanes and cinemas, factories and universities, oil-prospectors and archaeologists, machine-guns and ideas, has shattered beyond repair the traditional structure of economic life, affecting every Arab in his livelihood and his leisure, his private and public life, demanding a readjustment of the inherited social, political and cultural forms.

In these problems of readjustment the Arab peoples have a choice of several paths; they may submit to one or other of the contending versions of modern civilisation that are offered to them, merging their own culture and identity in a larger and dominating whole; or they may try to turn their backs upon the West and all its works, pursuing the mirage of a return to the lost theocratic ideal, arriving instead at a refurbished despotism that has borrowed from the West its machinery both of exploitation and repression and its verbiage of intolerance, or finally—and for this the removal of the irritant of foreign interference is a prerequisite—they may succeed in renewing their society from within, meeting the West on terms of equal co-operation, absorbing something of both its science and humanism, not only in shadow but in substance, in a harmonious balance with their own inherited tradition.

- 14) Gibb, H.A.R., *Islam*, Oxford Univ. Press, 1980, p15.

補記

イスラム教が急速に拡大した理由について、筆者はインドを頭に置いて述べた。その文献としては、例えば荒松雄『ヒンドゥー教とイスラム教』岩波新書、1977年の70頁に、ヒンドゥー社会と比べて「イスラム教徒の社会では、階層秩序と身分意識とを否定する同胞認識、あるいは平等感や連帯意識が目立つ」とある。

ペルシアにおいても似た現象があったことは、アン・ラムトン著、岡崎正孝訳『ペルシアの地主と農民』1976年、16頁に次のようにいうことからわかる。「イスラム教徒による征服が比較的容易にしかも迅速に行われたのは、イスラム教が耐えがたいほどの社会的劣悪な状態から、民衆の大部分を解放したという事実、たぶん因るものと思われる。一方、古い体制には、彼らの忠誠心を惹き起こすようなものは何らなかった。〔アラブ人〕侵入者との戦いは自分たちの生活の手段を守るための戦いであり、それは自分たちの幸福に資するものであるということ、また自分たちの支配階級を支持することは自らの幸福に係わっている人々を支持することになるということ、を感じさせるようなものは何もなくあった。」

以前の拙稿「マホメット物語Ⅰ——人間として、預言者として——」1993年において、マホメットが得た神の啓示は、彼の個人的・集合的無意識の所産であるとの仮説を述べた。しかしこのことはすでに先学が指摘していることを最近まで気づかなかった。即ちケンブリッジ・イスラム史、第1巻、モンゴメリー・ワット「マホメット」は、預言＝啓示の方法についていう：「重要な点は、その預言がマホメットの意識の産物でないということである。……預言が彼の中の無意識・または集合的無意識の作用、または何か神性的源泉から来たかという問題は、歴史家の能力を越えることである」と。啓示が「神性的源泉から来た」とはイスラム教徒の考えである。ワットは非イスラム教徒学者として、マホメットが得た啓示は、彼の個人的・集合的無意識の産物であるという推測

を提示している。

The important point is that the message was not the product of Muhammad's conscious mind.……The further question whether the messages came from Muhammad's unconscious, or the collective unconscious functioning in him, or from some divine source, is beyond the competence of the historian. (Muhammad by W. Montgomery Watt, *The Cambridge History of Islam*, vol.1, 1970, p31)

(1994.8.29受理)